二〇二二年一〇月一四日

暮れなづむ紀淡海峡鳥渡る　千鶴
朝月の中天高く微笑みぬ　明日香
団栗に肩をうたれし立ち話　あひる
夕萩や雨の始めの音しづか　ひのと
和菓子屋の店頭壺に草の花　満天
黒髪を腰まで垂らす秋の人　みきえ
さざめける棚田の秋を聞きにけり　明日香
かはらけを投げて厄除け紅葉山　智恵子
朝なさなテラスに香る金木犀　たか子
干し物に盗人萩の二つ三つ　せいじ

二〇二二年一〇月一三日

夕月や掛行灯の女文字　ひのと
野仏の濡れそぼつ朝秋薊　隆松
夕日落つ案山子の長き影法師　かえる
秋薊せせらぎに沿ふの渓の道　隆松
帆船の帆を染む灘の夕焼かな　千鶴
夜道ゆく不即不離なる月の友　たか子
チェンソーを担ぎ杣人冬支度　智恵子

二〇二二年一〇月一二日

沖雲を引き摺り込みて秋日落つ　せいじ
母と子の揃ひのリュック花野道　あひる
毬栗の落つる音する獣道　豊実
柿剥くやヨーヨーのごと皮垂らし　みきえ
猪の怒り凄まじ罠の檻　かえる
色変へぬ松に庇や遥拝所　なつき
標本の恐竜に似し秋の雲　たか子
もの捨てし家の余白や冬隣　ひのと

二〇二二年一〇月一一日

走り根を覆ふ落葉に雨しとど　せつ子
尻もちをつけど甘薯は手離さず　ひのと
島の子のもいでくれたる柚子ひとつ　ひのと
巫女鈴を細やかに振る宮さやか　明日香
墨汁を散らしたるごと秋夕焼　素秀
蜘蛛の糸きりきり舞ひす一葉あり　智恵子

二〇二二年一〇月一〇日

四阿の屋根を覆ひて草紅葉　せつ子
幼稚科は二時間だけの運動会　たか子

二〇二二年一〇月九日

赤い羽根つけて姿勢の良くなりぬ　明日香
座右とす手擦れの聖書秋灯下　むべ
どよめきの家まで届く運動会　せいじ
秀枝より秋日差し洩る杉美林　素秀
新蕎麦や背に徳利の陶狸　ひのと
相席の目の置きどころ走り蕎麦　ひのと
秋燕長屋門なる太梁に　素秀

二〇二二年一〇月八日

住み古りて庭に増えゆく石蕗の花　なつき
グランドゴルフ桜もみぢの散る苑に　はく子
一掬す龍の口より秋の水　ぽんこ
秋寒し施設の兄とガラス越し　はく子
うつすらと膜張るミルク小鳥来る　澄子
少年に父の面差し鯊を釣る　ひのと
線路沿ひ荒磯のごとく葛の波　明日香
肌掛にくるまる心地十三夜　むべ